

私も今は風越高校の一年生。でも昨年は今頃は右足の動かない病気で寝ていました。学校には行けず、この大切な時期に一月も休み続けていた私は、おもしろくない病氣や勉強の事などで、毎日毎日をゆううつに過ごしていました。

ぼつぼつ回復に向った病氣も、集中豪雨のためにまた逆もどり。それにこの豪雨は、私の村や家に大きなきずあとを残していった。百姓の命である稲を、一瞬の間に茶色の膚に変えてしまった。私の家は田んぼが一段近くやられた。

病氣のために使った数万の金、その金を米のきょうしゅつ金からまわそうと考えていたのに、それどころではなくなった。父は団体職員 母が主に経営している兼業農家とでも言う私の家は、その時は、ガマぐちから千円札が数日のうちに、何枚もつかわれたから、いろいろの面で母と父の対立も多い日々でした。

父の実家とクラスメートの家は、天竜川の中に入り、流れはしなかったが、他の所へ家を建てなければならなくなった。今だに忘れられない、有線の早急の連絡。

「今度は〇〇が危ない！」とふるえて聞いていたあの時。

道という道は山崩れや崖崩れで人が通るのにやつとのありさま。そんな様子だからバスなど通らない。病氣はまた悪くなる。勉強は二月ほうりつばなし。その時の私の氣持は、悲しみと絶望でいっぱいでした。

そんな日から半月後に夏休みが来た。私はその時クラスメートの優しい友情に心を打たれました。先生と皆で話し合い、私の休んでいた二カ月間の勉強を、数人の男女が四日間、入試の準備や、災害の復旧に忙しいのにもかかわらず、学校から一時間近くもある山道を登り、教えに来てくれました。病氣あがりの私にとり、えらい事だった。それに私も中学三年生。男子の時など気づかれて、次の日はまた熱が出て一日寝たこともありました。

夏休み後はバスで学校にかよいました。そして半年の間は走ったり飛びはねる事は禁止されました。私は、体の健康な人とちがひ、妙な一年だったようです。

一、二年の時の私の成績に比べたら低下はしていますけれど、入試が近くなつた一月頃からの、総合テストの結果、自分の希望した学校に受験できるようになった事は、私一人の力ではないと思つた。あの時、四日なりでも皆が、一生懸命教えてくれたからだ。あの日に皆が、

「災害のかたづけだ。一人の病氣のためになんだ。」

なんて言つて、来てくれなかつたら、きつと私も、

「あぶないから、良く家の人と相談しろ。」つて言われたかもしれない。

そして、自分の希望の高校へ入学できなかった悲しい人々の中に、私もいたかもしれない。そう思うと、クラスメートとは本当に優しく、ありがたいものなのかと、つくづく感謝した。

中学卒業後、全国からよせられたやさしい手紙の書いてとも、手紙の交換は

とだえた。そして中学卒業とともにクラスメートとも別れ、私たちはそれぞれ道を歩んでいる。進学者の人々とプラットホームで時々あうが、どちらともなく、だれでもが、顔をそらす。そんな私でも、中学の友は、皆優しかったなあと一人で心の中でつぶやいている。

バスの窓から、天竜川を見おろすたびに、豪雨の時、数十戸という家をのんだあのおそろしい天竜川を思い出す。そして二度とあんな日がこないようにといつも思う。今日もまた災害復旧工事に働く人々がバスに乗った。

(豊丘村豊丘中学校卒業 三十七年)